

バロック演劇と響き合う寺山修司の「いま・ここ」
三枝泰之（崇城大学 芸術学部）

01. 「演劇装置としての社会」

- ・「ことば、歴史、法律」など後天的な産物が「文化という台本」。

02. 寺山演劇とバロック演劇の類似

- ・バロック芸術に特徴的な表現技法として寓意(アレゴリー)がある。

03. バロック演劇の多くに

- ・「時間をこの場へ変えること」つまり「現在の顕在化」の技法として劇中劇がある。

04. 寺山は「人間の社会」という「日常的な現実の演劇性」をモチーフ。

05. 「演劇」という手法を使ったパフォーマンス＝バロック演劇の「現在の顕在化」と共通。

06. 日常性とフィクション性、現実世界と作品世界を二重に重ね合わせる「半世界」。

07. 寺山演劇の根幹は実在の表象つまり（模倣／ミメーシス）ではない。

08. 仮説として

- ・「寺山修司の演劇は“いま・ここ”を探す演劇」であり「“本当の現実”とは何か？を問う演劇である」。

09. 寺山演劇が“いま・ここ”を探す演劇であるという説の一例では

- ・1979年の作品『魔術音楽劇バルトークの青ひげ公の城』（西武劇場）がある。

10. シェイクスピアは新プラトン主義との関連・類比を演劇構造の劇中劇として演出。

11. 「世界は劇場で、／男も女も役者に過ぎぬ。／退場があれば、出番がある。／そして生きている間にひとりがいろいろな役をやる。」これらシェイクスピアの台詞は人間存在を、アイデア界から眺め形而上学的な視点で宇宙の入れ子としての現実存在と劇場の舞台を類比的に表現している。

＝グローブ座（地球座）1599

12. 寺山演劇つまりアレゴリーの演劇もまた「ここにありながら、ここにはない」という根源への視点を示唆する演劇。

13. 寺山の演劇では劇場の中の虚構としての演劇も、それを内包する現実社会という劇場も同等の虚構性に支えられている。

14. 寺山修司からかかってきた電話。アレゴリーの演劇を標榜して、ここにありながらここではない現実を見せようとした作者は、ここにありながらここではない場所からこの虚構性つまり演劇性を暴こうとしたといえる。死の世界とは霊的な世界。

15. 「メメント・モリ 死を思え」そこに悲哀の戯れとしてのバロック演劇寺山演劇がある。両者を結びつけるものは、生と死を並置し寓意的に表現し、「いま・ここ」「歴史の現在性」という時間の裂け目から、本人も知らない根源やアイデア界を垣間見ようとした。